

## ヨハネ福音書 21章「もうひとつの結末」 - 2024.02.01

### 二つの結びと21章の位置づけ

ヨハネの福音書は20章30-31節で一度完結したように見える。「この書には書かれていないけれど、まだ他にも多くのしるしを行いました」という言葉に続き、「これが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを信じるため、また信じてイエスの名によっていのちを得るためである」と締めくくられる。この目的は、ヨハネ3章16節の「実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者がひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」という福音書の核心的メッセージと呼応している。

ところが21章が続き、そこでも「他にもたくさんあるけれども書き記すことはできません」という結びの言葉がある。このため、二度終わりがあるような印象を受ける。21章は後書きや追記のように見えるが、最初の写本からこの形で存在しており、マルコの福音書の終わり方とは異なり、当初から一つの書物として構成されていたことがわかる。

ヨハネの福音書には「初めにことばがあった」という18節までのプロローグがあり、21章はそれに対応するエピローグとして機能している。

### 炭火のそばで——三度の問いかけと過去の記憶

21章で最もよく知られているのは、復活したイエスがペテロに三度「私を愛しますか」と問いかける場面である。ペテロは三度「私が愛することはあなたをご存知です」と答え、イエスは「私の小羊を飼いなさい」「羊を牧しなさい」と命じる。

この三度のやり取りは、明らかに18章でペテロがイエスを三度「知らない」と否定した出来事を想起させる。しかも両方の場面に「炭火」が登場する。ペテロが大祭司の庭で炭火にあたりながらイエスを否定したこと、そしてガリラヤ湖畔で炭火のそばに魚とパンが用意されていたこと。この炭火という共通の舞台装置が、過去の失敗と現在の回復を結びつけている。

この場面は、ペテロの失敗に対してイエスが優しく丁寧に悔い改めに導き、罪を赦した箇所として理解されることが多い。「愛しますか」という問いで、イエスの言

葉(ギリシャ語のアガパオ)とペテロの答え(フィレオ)の使い分けについて、「無条件の愛(アガペー)」と「友愛(フィレオ)」といったニュアンスの違いを強調する解釈である。

## 複数の召命の記憶が重なる場面

しかし21章は単なる赦しの場面ではなく、もっと重層的な意味を持っている。ここにはいくつもの過去の出来事が重ねられている。

まず、13章の最後の晩餐でペテロが「いのちも捨ててついて行きます」と宣言し、イエスに「三度知らないと言うだろう」と預言された場面。

そしてルカの福音書5章に記録されている、ペテロの最初の召命の場面。魚が捕れず、イエスの言葉に従って網を下ろすと大漁になり、ペテロは「私から離れてください、罪深い人間ですから」と言った。それに対してイエスは「怖がることはない、これからは人間をとる漁師にします」と告げ、ペテロは何もかも捨ててイエスに従った。

ヨハネ21章の大漁の奇跡は、この最初の召命を再現している。つまりこれは「再召命」の場面なのである。最初の召命があり、復活後にもう一度その召命を確かめる、二度目に召命されるという構造になっている。

## 「ヨハネの子シモン」という呼びかけの意味

イエスがペテロを「ヨハネの子シモン」と呼びかけることにも意味がある。この呼び方は、ヨハネの福音書1章42節で、アンデレに連れられて初めてイエスに会った時に「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをペテロ(岩)と呼ぶことにします」と言われた場面と同じである。

21章でもう一度「ヨハネの子シモン」と三度呼びかけることで、再びペテロとして召命しているという意味が込められている。原点に立ち返り、もう一度新たに使命を与えられる瞬間なのである。

## 殉教の預言と「私に従いなさい」

三度の問答の後、イエスはペテロの死に方について語る。「若かった時には自分で帯を締めていたが…」と、ペテロがどのような死に方をして神の栄光を現すかを示唆し、殉教を預言する。そして「私に従いなさい(私について来なさい)」と告げる。

するとペテロは、イエスが愛された弟子(ヨハネ)を見て「この人はどうですか」と尋ねる。この弟子は、パンを裂いた時にペテロに頼まれて「裏切る者は誰ですか」とイエスに聞いた弟子であり、最初からずっと一緒にいた仲間である。

ペテロの問いに対し、イエスは「私が来るまで彼が生きられるのを私が望むとしても、それがあなたに何の関わりがありますか。私について来なさい」と答え、再び「私について来なさい」と語る。

## 良い牧者の使命——羊のために命を捨てる

「羊を養いなさい」という命令と、ペテロが殉教するという預言は、ヨハネ10章の「私は良い牧者です。良い牧者は羊のために命を捨てます」という説教を思い起こさせる。イエスが十字架で身をもって示したように、イエスについて行くペテロもまた、羊のために命を捨てることになる。

ペテロの最期については伝説があるが、彼自身が書いた「ペテロの手紙」では、長老たちに対して、苦難の時に信仰の戦いを最後まで戦うよう励ましている。「神の羊の群れを牧しなさい」「群れの模範となるように」と教え、思い煩いを神に委ねるよう語っている。

またペテロは手紙で「悪魔が吠えたける獅子のように歩き回っている」と警告しているが、これはルカの福音書22章31節でイエスが言われた「シモン、シモン、サタンがあなた方を麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました」という言葉と重なる。イエスは「あなたの信仰がなくならないように祈りました。立ち直ったら兄弟たちを力づけてやりなさい」と言われた。

ペテロの三度の否認の背後にはサタンの働きがあり、イスカリオテのユダと同様にサタンに惑わされたという側面も覚えておく必要がある。

## 結び——「この人はどうですか」という問いの意味

良い牧者は命を捨てる。そして最後に残る「この人はどうですか」という問いは何を意味するのか——21章はここで一度区切りを迎える。